



TITLE:

<書評>内藤直樹・山北輝裕編 『社会的包摂/排除の人類学--開発・難民・福祉』 昭和堂、2014 年、2,500円＋税、272頁

AUTHOR(S):

佐藤, 航也

---

CITATION:

佐藤, 航也. <書評>内藤直樹・山北輝裕編 『社会的包摂/排除の人類学--開発・難民・福祉』 昭和堂、2014 年、2,500円＋税、272頁. コンタクト・ゾーン 2015, 7(2014): 337-343

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209787>

RIGHT:

内藤直樹・山北輝裕編

## 『社会的包摂／排除の人類学 ——開発・難民・福祉』

昭和堂、2014年、2,500円＋税、272頁

佐藤航也

難民、野宿者、先住民など社会的に排除されていると言われる人びとに対して様々な社会的包摂が試みられている。それにも関わらず、社会的に排除される人びとの問題は今なお大きなものであり続けている。現代の「社会的排除／包摂」をテーマにしたこの論集は、国立民族学博物館における若手研究者による共同研究プロジェクト「＜アサイラム空間＞の人類学——社会的包摂をめぐる開発と福祉パラダイムを再考する」のメンバーによって編まれた。開発・難民・福祉の3領域について各4人の論者がそれぞれのフィールドでの事例をもとに議論を行っている。

まず内藤の序文をもとに、本書の主題である「社会的包摂／排除」と、それを読み解く鍵となる「アサイラム空間」とはどのようなものなのかを整理したい。「アサイラム空間」とは、閉鎖的な「全制的施設」の内部を「社会的包摂／排除」の場として捉える従来の枠組みに対し、その外部を含めた空間を捉えるために本研究プロジェクトが新しく提示する概念である。

「社会的排除」とは、そもそも「これまで単に静態的な経済的・物質的状态として捉えられてきた「貧困」という概念を社会的・経済的・政治的な観点から再定義した」(9頁：以下、本書の引用頁は数字のみを記載する) 概念で、貧困のみならず社会の主流からはずれた人びとの状況を指し示す。一方でこのような排除状態を解消するために、様々な「社会的包摂」が取り組まれる。従来の国家や権力による社会的包摂の一つの形である「全制的施設」について明らかにしたのがアーヴィング・ゴフマンの『アサイラム』である。ゴフマンは全制的施設を「多数の類似の境遇にある個々人が、一緒に、相当期間にわたって包括社会から遮断されて、閉鎖的で形式的に管理された日常生活を送る居住と仕事の場所」[ゴッフマン 1984：v] と定義し、管理のための「自律的な主体の形成」などの人間性を喪失させるような施設の仕組みを明らかにした。しかし、現代的な「社会的包摂／排除」をめぐる状況は変容している。現在では「全制的施設」はその目的をむしろ「さまざまな困難を経験する人びとの人間性の回復」(12-13) に置いている。一方で、社会的な排除状態にある人びとは今も存在し、彼らの生を管理しようとする権力の作用する場もま

た、古典的な「全制的施設」とは様相を変えつつもなお存続している。

そこで、本書は「社会的包摂／排除」をめぐる場の空間性を捉える「アサイラム空間」という独自の概念を提示する。内藤はこの概念を「何らかの「全制的施設」、およびそれに関わる地域社会・市場・制度・組織などが複雑に絡み合うなかで形成される包摂と排除が入り組んだ空間」(1)と定義する。具体的には、先住民定住地・障害者福祉施設などの包摂の場や、難民や野宿者などの「社会的排除」の状態にある人びとが議論の対象となる。

本書はこの「アサイラム空間」の視点により、現代における「社会的包摂／排除」の複雑な様相を解きほぐすことを試みている。この概念は全制的施設の内外を含む空間を捉え、周辺の住民やNGOなどの中間団体など、多様な立場を持つ人びとの集まりが「当事者」として関わりあうことによって「社会的包摂／排除の場」が構成されていることを明らかにする。また、包摂の試みが逆に人びとを排除の状態に留め置いてしまうような「包摂／排除」の錯綜した関係や、開発・難民・福祉などの異なる領域における「社会的包摂／排除」の現場としての共通性が指摘される。

本書の構成は以下のとおりである。

- 序章 「社会的排除／包摂」現象への人類学的アプローチ（内藤直樹）
- 第Ⅰ部 開発——「弱者」がつくられるフィールド
  - 第1章 ケニア牧畜民の伝統社会は開発から逃れられるか（内藤直樹）
  - 第2章 エチオピア牧畜民に大規模開発は何をもたらすのか（佐川徹）
  - 第3章 ボツワナの狩猟採集民は「先住民」になることで何を得たのか（丸山淳子）
  - 第4章 オーストラリア先住民の「暴力」といかにつきあうか（飯嶋秀治）
- 第Ⅱ部 難民——グローバリゼーションと国籍
  - 第5章 アフリカの難民収容施設に出口はあるのか（中山裕美）
  - 第6章 アンゴラ定住難民の生存戦略は持続可能か（村尾るみこ）
  - 第7章 在日インドシナ定住難民の「彼らなりの暮らし」はどう保たれているか（岩佐光広）
  - 第8章 第三国定住難民と私たちとの接点はどこにあるのか（久保忠行）
- 第Ⅲ部 福祉——私たちは「隣りにいる他者」といかに生きるか
  - 第9章 ホームレス状態から地域生活への移行において何が問われているのか（北川由紀彦）
  - 第10章 野宿者の日常的包摂は可能か（山北輝裕）
  - 第11章 精神障害者の世界は受け入れられるか（間宮郁子）
  - 第12章 脱施設化は真の解放を意味するのか（有蘭真代）
- 終章 開発／難民／福祉の横断を終えて（山北輝裕）

では、ここから各章の内容を要約し紹介していく。第Ⅰ部では、「開発」をテーマに四者が議論を展開する。

第1章では内藤直樹がケニア北部に暮らす遊牧民アリアールの集落を事例に、「開発の

経験をいかに理解すべきか」という問題について論じている。内藤はグローバルな力の働く開発地での「開発の経験」を、グローバルなモノの現地における解釈や利用、既存の文化の変化、開発への認識や対処の枠組みの生成、というプロセスとして捉えている。内藤の調査地の集落は生活様式などに見える伝統的な様相とは反して、大規模な開発によって新しくできたものだった。つまり人びとの「いま」の開発に対する態度は、過去の開発の経験を踏まえた再帰的な実践として理解すべきものであった。内藤は開発の経験を常に変化と新しい実践の可能性を持つ動的な過程として描き出している。

第2章では佐川徹がエチオピアのサウスオモ県に暮らす牧畜集団ダサネッチを取り上げる。彼らは政府による経済成長のための開発推進と国際 NGO による伝統保護のための開発反対との狭間にいる。開発をめぐる対立する両者はともに、これまでの近代国家とダサネッチの歴史やその中で育まれた人びとの多様な姿を見過ごしていることを佐川は指摘する。エチオピアでは少数派である北部の農耕民が近代国家形成の中心を担い、牧畜民は「遅れた野蛮な」存在として位置付けられてきた。そんな中でダサネッチの人びとが暮らすサウスオモ県では近年国家の主導権により様々な開発が進められている。しかし、人びとの立場は様々であり、開発に対しての反応も反対一色ではない。街では、将来への楽観的な期待を込めた肯定的な評価も聞こえる。また、土地を失いかねない村の人びとも強く反対するよりも、一人一人の意見を尊重し村内での対立を避けることを優先している。佐川は歴史とそれぞれの立場に依拠したダサネッチの多様な姿を国内の多数派に示すことに、牧畜地域の現状への注意を喚起する積極的な契機としての可能性を見出す。

第3章で丸山淳子は、ボツワナに暮らす狩猟採集民のサンが「伝統的な生活」を求めて起こした2006年の裁判を取り上げて論じている。この裁判で勝利したサンの人びとはセントラル・カラハリ動物保護区（CKGR）での「伝統的な生活」を認められた。しかし、「近代的な生活」か「伝統的な生活」の二者択一を争う裁判では、サンの人びとの「近代的な生活」が秘されたものとなり、CKGR内で行政サービスの提供義務がないなどの問題が残っていた。また、提訴者か否かでCKGRに帰れるかどうかが決まり、さらに再定住地では経済的格差が生まれるなど、「個人の選択の結果」という論理によって特定の人々が排除され、人々の間に分断が生まれている。こうした複雑な現実の中で、サン自身は日常生活において試行錯誤をしていることに丸山は注目する。CKGRと再定住地「コエンシャケネ」との間を非公式的に行き来することなどによって、政府や「先住民」運動が彼らの意に反して作り出した場の性格をずらそうと試みている。このようなローカルな日常にある試行錯誤とグローバルな運動とをつなげることにこそ「自分たちで自由に決める」ための道筋があると結論付ける。

第4章では飯嶋秀治がオーストラリア・アボリジニを事例として、暴力と先住民の自治について論じている。アボリジニの先住民運動が進展したことで、1972年には自主決定政策の方針が出され、1976年からは「アボリジニ信託領」が認められるようになった。この時点でアボリジニだけの伝統的な暮らしは存在していなかったにも関わらず、「先住民の自律」の方針は失業率の高さやアルコール依存、暴力など白人社会と交わってきた歴史の中で生まれてきた様々な問題もまた「自治」の範囲としてしまっていた。2007年に始まっ

た「介入政策」では先住民の児童性的虐待への対策がとられた。これは先住民に対する「差別」であるとの批判がある一方で、実際的な効果から肯定的にも評価された。飯嶋はこのような現実を理解することを「文化相対主義」と「社会運動」の相互作用という視点で検討する。文化相対主義は文化の差異から優劣の関係を取り払ったが、混交的に生成してきたはずの文化を社会運動の過程で実体化させてしまっていた。飯嶋はこの相互作用を乗り越えて私たちと彼らの関係をいかに再構築するかが共生へ向けての問いだと述べる。

続く第Ⅱ部は「難民」についての以下の四つの議論である。

難民はメディアでも注目を集めるトピックだが、それと同時にいつの間にか忘れ去られていくものでもある。第5章で中山裕美は、「長期化難民」の現実の暮らしから、難民をめぐる包摂／排除について論じている。「条約難民」の受け入れ方は庇護国ごとに異なるが、難民の収容施設はしばしば都市部からの「隔離」という形で排除されている。中山が事例とするザンビア西部の難民定住地マユクワユクワは、首都からは隔離されているが、1万人超の難民は現地でマジョリティとなり、現地の住人との間に緊張関係が生じている。一方で、地域住民にとって難民は社会的・経済的に重要なパートナーとなってもいる。また、難民収容施設の出入りが管理される一方で、許可なしのインフォーマルな移動も行われている。難民は包摂に受動的であるだけでなく、ときに自立的なアクターとなり地域の構成員としての地位を持つ。難民に対する「庇護」の文脈と実際の状況との差異を認識したうえで、変化への対応が求められている。

第6章では村尾るみこがザンビアの「自主定着難民」について論じる。ザンビアのアンゴラ移住民は、社会経済的なネットワークを構築し自給自足を達成する能力を得て自ら新しい社会に定着することのできた「難民の成功例」と期待されている。だが、国家制度においては一国民として包摂されながら、地域社会では社会経済的に排除されていた。「マウイコ」という差別的な呼称が与えられ、キャッサバ生産という非持続的な経済基盤のもとに生活している点にそうした排除が見て取れる。「難民の成功例」という言説は、このような「排除」を見過ごし再生産しかねない。村尾は他者の保護のあり方や問題解決の道筋として、地域社会の歴史的経験の理解、人びとの日常的生計の可能性と限界への理解、さらに世界情勢との連動を絶えず再検討する必要性を述べて論を閉じている。

第7章で岩佐光広は、日本に暮らすインドシナ定住難民の食生活についての素朴な問いから、彼らの包摂と排除について考察する。神奈川県に暮らすラオス定住難民たちは、ローカルなネットワークを通じ、ラオス料理に欠かせないレモングラスを、庭先での家庭菜園や地域にあるエスニック食材店から入手していた。インドシナ難民について「包摂と排除の問題」だけでなく、例えばレモングラスを端緒として彼らの「暮らし」の総体を参照しつつ、「社会的包摂／排除」の問題系を捉え直すことの必要性を岩佐は主張する。

第8章ではビルマ出身の「カレン難民」について久保忠行が議論を展開している。「カレン難民」受け入れについて大きく報じられたにも関わらず、「個人情報」の壁に阻まれて難民と「直接会うことができない」日本社会について、久保は難民と受け入れる私たちの関係を媒介する制度に着目しつつ考察していく。排除を生み出す制度をただ批判することは、支援のまなざしが被支援者を被支援者のままに留め置くことと、批判者自身を受け



入れの当事者から除いてしまうこと、という二つの問題を含んでいる。難民の問題は「私たちの問題」でもあり、「フィールド」は彼らと私たちの係留点にあることを久保は提示する。

最後に第Ⅲ部では福祉をテーマに四つの論が展開される。

まず北川由紀彦が担当する第9章で扱われるのは「自立支援事業」という野宿者を包摂するための施策である。都内の「自立支援センター」では、就労自立のため原則2ヶ月間の滞在が許される。だが、雇用の数は労働市場の状況に左右され、さらに労働現場での選別によりふり落とされる人びとがいる。「自立支援事業」は野宿者の生活の場を住居へと替えてきたが、その先の雇用をめぐる選別は避けられない。また、地域統合の結果として住居に暮らす「孤独な老人」の増加が懸念される。さらに、完全にいなくなりほしない路上生活者そのものとはどのように向きあうのか。「路上から地域へ」という転換は、貧困者の排除の形態の変換に終わりがねないことを北川は警告している。

第10章で山北輝裕は、野宿者の「日常的包摂」について検討する。制度的包摂は対象者を選別する仕組みを持つ限り、そこからさらに排除される者を生み出す悪循環を招く。そこで、山北は日々の生活レベルにおける包摂の可能性に注目する。例えば、2011年の野宿者援助のボランティアにおいて、ある野宿者と子どもとが日常的に遊ぶ関係を見つかる。当初その関係を問題視した大人たちも、彼が「安全」と分かると子どもを預けるまでになった。このような制度的包摂の先にある日常的な実践を行う余地を山北は「残余」という言葉で表す。野宿生活は社会から隔絶されているように見えるが、それでも他者との接触・介入は不可避である。この他者との関係性はさらなる排除だけでなく「日常的包摂」をも生み出す「残余」の可能性を持っている。

第11章で間宮郁子は、北海道浦河町の「べてるの家」での調査をもとに、統合失調症の人びとの包摂について検討する。統合失調症の従来の解釈とは「別の解釈の可能性」を間宮は提起する。精神病院から社会復帰施設への転換は障害者の「意志」や「自己決定」を認めてきた。しかし、その合理的な人間像は、障害者の身体に規律や従順さを求め、幻聴や妄想をプライベートな問題として秘してしまう。「べてるの家」でのエピソードからは、障害者の身体が外部の影響に敏感に反応しつつ多様な体験をしていること、そして病いに対して多様な自己を認めることによる対処が見出せる。間宮は、障害者の社会参加推進の流れの中で身近になりつつある彼らの生活に対し、いかに応答すべきか問いかけている。

有蘭真代は第12章で、国立ハンセン病療養所における1950年代の抵抗運動をもとに議論する。有蘭は、新自由主義やポストフォーディズムにより称揚される「まやかしの自由」から離れ、別の自己と社会のありようを想像する手がかりを提示することを試みている。1965年の「らい対策の大綱」に反対する「全国国立療養所らい患者協議会」の患者運動は、「大綱」が掲げる解体から施設を防衛しようとしてきた。ゴフマンがいう「アサイラム」に対し、「アジール」という語は不可侵性や下からの自由を意味する。患者運動は、絶えざる介入や管理に対抗して、療養施設を不可侵なアジールへと転じた。有蘭は彼らの運動と実践の中から、現代の社会が求める「フレキシブルさ」ではない新たな自由の

可能性を見出している。

以上の内容を踏まえたうえで、本書を評価していきたい。

まず「アサイラム空間」の視点が現代の「社会的包摂／排除」についての議論の可能性を拓いたことは大きい。ゴフマンのアサイラムの議論は「閉じられた」施設内部のみを対象としており、施設外への視点が欠けていた。本書が提示する「アサイラム空間」の概念はこの点を補完するものと言えるだろう。ここで「アサイラム空間」が捉えたものを以下の二点に分けて評価したい。一つ目は全制的施設を含む空間の動的な側面について、二つ目は「社会的包摂／排除」に関わるアクターとその立場の多様さについてである。

一点目の空間の動的な側面は、本書の各章において全制的施設の性格付けの揺らぎやその境界の曖昧さについての示唆に表れている。現代の全制的施設に生きる人びとは、施設の内外を公式／非公式に移動することなど様々な形で外部との接点を持っている。それらの実践によって全制的施設は、その性格付けがずらされ、境界が曖昧なものになり、「包摂／排除」の権力が貫徹する場ではなくなっていた。例えば第3章での丸山の議論において示されたサンの人びとの再定住地とCKGRでの実践は、人びとの現在の生活を無視したCKGRに対する伝統的な性格付けという「場の意味をずらす」試みであった。「アサイラム空間」によって「社会的包摂／排除」の現場が持つ変化の可能性を捉えることができるだろう。

二点目として、各章で扱われた「社会的包摂／排除」の空間が多様なアクターや立場によって構成されていたことについて述べる。各章では国家やNGOのほか、地域社会の人びとなどのアクターが関係しており、さらには故地に帰れる人と帰れない人などの多様な立場が見られた。ここから「アサイラム空間」の概念が施設外部を捉えつつも、「内／外」といった二項対立的なものではなく多様な関係性を射程に含むことに成功していることを評価できる。また、これには与えられた認識の枠組みを自明のものとせずフィールドワークの結果をもとに現場を捉える人類学の特性も貢献しているだろう。一方で、このアクターの多様さは「社会的包摂／排除」の場が様々な切り取られ方の可能性を有することを表している。例えば各章における様々な「社会的包摂」は、「社会」の多層性という観点から説明できる。竹沢尚一郎によれば「社会」は「国家と広がりをおなじくする枠組みとしての社会」と「家族や友人、職場や地域社会などの枠のなかで、共同の生を営んでいるという意味での社会」に分けることができる〔竹沢2010：iv〕。野宿者についての二つの章はこれに対応し、第9章で北川が自立支援センターという行政による包摂を取り上げ、第10章では山北が「日常的包摂」という地域の人びとによる包摂について議論している。「アサイラム空間」が含む多様なアクターは、入り組んだ複雑な関係性を持っている。それを捉えるためには、ただ並列させるだけではない切り取り方の工夫が求められるだろう。

次に、本書が社会問題に取り組むがゆえの「価値判断」の問題について述べる。内藤は序章で文化相対主義的な価値観を「自分には受け入れがたいが関わらざるをえない「他者」とともに生きるやり方を探る現場においてこそ必要とされている」(4)ものと位置付ける。本書が扱う「社会的包摂／排除」の現場はそのような「他者」が出会い、異なる価

値観同士がぶつかり合う場である。人類学が「問題の解決」に貢献することはもちろん意味深い、同時に人類学者自身もまた特定の立場を持つ一人の「他者」であることに注意を払うことも重要であろう。

その点について、本書にしばしば登場する「私たち」という言葉が含意するものから考察したい。「私たち」という言葉に読者を含ませることで、本書で議論される問題は読者が今まさに直面しているものだを示すことができる。しかし、この「私たち」が誰を含んでいるのかは自明なことではない。「社会的包摂／排除」を取り巻く「私たち」とは同じ社会に暮らす人びとを指すべきだろうか。それともより普遍的な人間を指すべきだろうか。また、内藤は「しばしば私たち自身がこれらのアクターによる支援の対象となることも、あるいは支援する側にたつこともあるだろう。」(12)と述べているが、社会問題に対して強い関わりを持たない人びとは「私たち」ではないのか。「社会的包摂／排除」の問題系に組み込まれている存在として「私たち」を捉えることは、「アサイラム空間」の視座を生かすものである。しかし、この「私たち」という言葉自体が「包摂／排除」の裏表の関係を含み、「私たち」を選別してしまっている。

「私たち」が「他者」を包摂するのか、それとも「他者」のままであることを許容するような形で包摂する術を社会が見出すのか。「社会的包摂／排除」の問題は間違いなく「私たち」の問題である。「他者」と「私たち」との矛盾を乗り越える社会を構想するためのきっかけとなる本書の議論の更なる発展を期待したい。

#### <参考文献>

ゴッフマン、アーヴィング 1984 『アサイラム——施設被収容者の日常生活（ゴッフマンの社会学3）』 石黒毅訳、誠信書房。

竹沢尚一郎 2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』 中央公論新社。